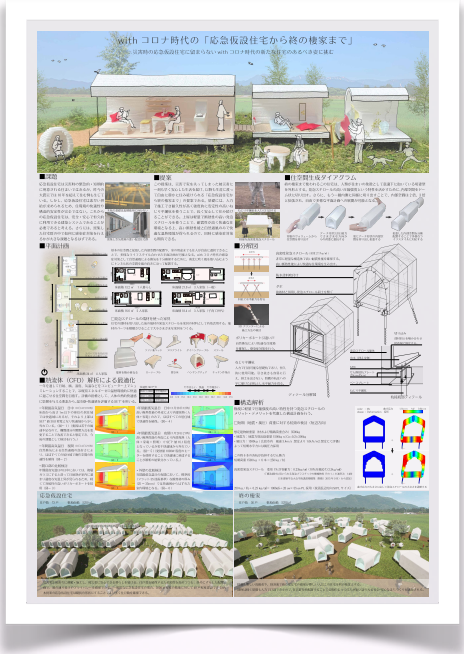
【審査員賞】【齊木 崇人 選】
No.19「withコロナ時代の 「応急仮設住宅から終の棲家まで」」
広島大学中薗研究室（中薗哲也、福島岳大、田口湧力、山下正太郎、山本千結）、
なわけんジム（名和研二）



受賞コメント

この度は、このような名誉ある賞を頂き有り難うございます。災害後の応急仮設住宅について、ゼロエネルギーでの快適な住環境の確保と、基礎の法適合を目指すことで、二次災害を減災するこの提案を評価して頂いたことを大変有難く思います。この軽量で簡単な工法の住宅の提案が、仮設住宅に留まらず新たな時代の住宅建築の在り方をも切り開くことを目指して、今回の賞を励みに、実現に向けての更なる研究に邁進してまいります。（福島岳大）

評価コメント

すでに世の中に広く普及する発泡スチロール素材を使い、応急仮設住宅から終の住処まで提案する実験的提案である。是非実験してその成果を公開し、応急仮設から終の棲家までの時間を経た成長と変化のプロセスや、素材の再生利用も考察に加えてほしい。（齊木）

妻側の穴をどうやって塞ぐのかが疑問です。素材が軽量で受風面積が大きな構造体が台風時にどのような挙動をするのでしょうか。（相良）

仮設住宅の基本材料を発泡スチロールとし、しかも１つの塊から何部屋もと、家具を切り出す、という発想は斬新であり、ぜひ試作を見てみたいと感じた。が多くの疑問も同時にある。まずこの大きなスチロールの塊は通常はどこにあるのか。非常時にはどのように運ばれるのか。誰がどう施工するのか。外装はどんな仕上げになるのか。個別のニーズに合致する家具の切り出しはいつ誰が担うのか、等々。そして終の住処とまですることが可能というそのスチロール素材はすでに強度・経年変化における耐久度等の面で特定されているのか？これがもっとも大きな課題か。終の住処とまで欲張らずとも、仮設住宅の新たな提案というだけでも価値はあるとは感じる。（平林）